

雑学と乱読

太田 次郎

この何年か、入学行事のガイダンスの中で、附属図書館について一言いわねばならないことになった。そこで、いつも「雑学と乱読のすすめ」を話している。

昔から、読書といえば、「すぐれた古典をひもとけ」、「良書を精読せよ」といわれるし、学問は「狭くても深いのが良いのであって、浅くて広いのは価値がない」とされている。

生来、生真面目が欠けていて、何事にも好奇心をいだいて、「わき見専門の人間」であるから、新人生の前で気づいてみてもしかなかったとあきらめて、やや逆説的な話をするこ
とになる。

ある年、極端な乱読の例として「文学全集を片っぱしから読破するのも一つの方法である」といったら、素直な新人生が早速図書館にやって来て、実行し始めたこと知らされた。何だか罪深いことをすすめたような感じがして、それ以後は少

しつっしんだ発言をしている。

いうまでもなく、人間の一生は限りがあり、その間に送れる「知的生活」の時間は、さらに限られている。そんな貴重な時間を浪費するのはもったいないと考える人にとっては、乱読や雑学はおよそ無縁のようにみえる。

しかし、知的生活について説く人々の本を読んでみると、例外なくたいへんな読書家であって、結構乱読を楽しんでおられるのが、行間ににじみ出ている。

大体、初めから精読のみをしようとしてもできるわけはないであろう。能率化を目ざして、他人がリストアップしたいわゆる良書に頼るという心がけ自体が、読書人としての資格を欠いているのではなからうか。ある本が面白いかな否かは、読者の置かれた状況に依存することが多く、万人に興味があ

って、感銘を与える本ばかりになったら、この世は味気なくてやり切れないように思われる。

イギリス人の最高のぜいたくは、暖炉の前で、スコッチをちびちびなめながら、推理小説のページをめくっていくことであるといわれる。推理小説狂の筆者にとっても、「それを読むことが何の役にも立たないこと、そしてこの忙しい世の中でその役にも立たないことを楽しめる」のが価値があるのであって、「推理小説を読んで、論理的な思考力が養える」などといわれたら、全く白けてしまう。

読み終ってつまらなかつたら、時間を無駄にしたなどと考えないで、そのうちに面白いのにお目にかかれるかも知れないと、優雅な気持ちになる方が、幸せであらう。

雑学の方も、乱読とよく似ている。幅広く学んでおけば、専門を見直す広い視野ができるなどと考えない方がよさそうである。

なるほど、世の中には「学際」ということばや、その原語の「インターディシプリナリー」などという三度いったら舌をかみそうな変な語が流行している。環境や人口問題など人

類が直面する難問を解決するのは、狭い学問では駄目であつて、多くの専門家が学際的な視野で協力する必要があると説かれていゝる。その通りかも知れないが、雑学とはそんな目的意識のはっきりしたものをいうことばではないと思われる。もっと気楽な加減なもので良いのではなからうか。

「おか目八目」にしても、うまく役立つことは少なく、ふつうは「はた目にはわからない」方が多いようである。

人間は、行動に合理的な目的をいだけ動物といわれるし、特に日本人は真面目らしいので、何ごとも目的をはっきりさせないと満足できない性向があるらしい。

しかし、雑学も乱読と同じように、直接役立つことは保証できないと考えた方が良さそうである。

とにかく面白そうだから、ちょっと首をつっこんでみようと充分であらう。他人に迷惑をかけない限り、いろいろ聞いてみることは、それ自体楽しいことである。

世の中のことに目くじらばかりたてないで、どうせ一生は一度しかないと考えて、乱読や雑学を楽しむ人々がふえてきたら、今の世よりも住み良くなることは確かなように思われる。(お茶の水女子大学)